

会報 ペンリレー スタート!!

第1回



安部 有樹
(宗高四十八回卒)

平成九年に卒業しました安部有樹です。甚だ僥越ではありますが、川島照亮前会長が「会報」の新しい企画として始められました「ペンリレー」の第一回目を担当させていただきましたこととなりました。

私が母校を後にして二十一年が経ちます、そこで「同窓会」への思いの一端を述べてみたいと思います。

◆「無縁社会」に対峙して

日本が「無縁社会」と言われて久しい。国、各地方自治体も策を講じてはいるが、一朝一夕に効果が表れるものではない。この何とも寂しい響きの社会を生き抜く一つの拠り所として、同窓会を捉えることも一考であると思うのである。

私は両親のお陰で幸いにも大学ま

で進学することができた。私は東京の大学に進学したが、卒業後の繋がりを考えてみると、やはり高校時代の繋がりは特に強固であるように感じる。先輩方から連綿と受け継がれてきた「タテ」の繋がりと同級生同士の「ヨコ」の繋がりを、現下の無縁社会を生き抜く拠り所と位置付けるといふ発想は大袈裟だろうか。

◆同窓会が果たす役割

では、そもそも同窓会が果たす役割とは、何であろうか。

従来の役割としては、運動部が全国大会に出場したり、今回の母校のように、周年記念事業で費用を募ったりするという後方支援的な側面があるだろう。

また、特に我々のように「現役」世代にとつては、同窓会に参加することで、仕事上の繋がりが生まれるきっかけとなる等実利的な一面もあるのではないか。

しかし、私はそのような一切を抜きにして、ただ旧交を温める場であるということだけで十分ではないかと思うのである。世代を越え「宗高卒業」という共通項だけで、一瞬にして繋がることができる、これだけではないのだろうか、と。

◆未来への「レガシー」

二〇二〇年の東京オリンピック。パラリンピック(オリパラ)が、刻一刻と近づいてきている。平成二十四年(二〇二二年)のロンドンオリパラ以来、「レガシー」という言葉が聞かれるようになった。レガシーとは本来「遺産」という意味であるが、オリパラの文脈においては会場等を大会時のみではなく、その後の継続使用も考慮して新設するといった意味合いで用いられる。

私は今回の百周年は、母校にとつてオリパラのような意味を持つと考えている。つまり、これまでの百年の節目であると同時に、次の百年に向けた新たな出発点として位置付けることができると思うのである。

◆次の百年へ

我々は、今回記念事業として設置される照明や部室整備等の「ハード面」に加えて、「ソフト面」にも思いを致したい。それはとりもなおさず、これまで先輩方が継承してこられた「質実剛健、自強不息」の校訓、そして次世代に向けた我々からの新たなメッセージに他ならないのではないか。

今から百年後、つまり母校が二百周年を迎える際、恐らく我々の世代

が二百周年記念式典に参加することは、ないだろう。

形あるものは、いつか消えゆく。しかし、形のないものこそ時を超えて受け継がれていくものであり、また受け継いでいくべきではないだろうか。

我々が未来の後輩たちに残せるものは、果たして何であるのか。百周年を迎えた今、我々卒業生の責務として、考える必要があると考える。

◆志を果たしに・・・

日本人であれば誰もが知っているであろう唱歌「ふるさと」。三番目の歌詞に「志を果たしていつの日にか帰らん」とあるが、私はこれからの時代、ふるさととは「志を果たしに」帰る場所となるべきではないかと考えている。

幸い宗像市も「宗像市人口ビジョン」の中で、将来の方向性の一つとして「若い世代が暮らしたい街の実現」を掲げている。この精神的土壌が若者の間に広がれば社会全体の価値変革が起きるのではないだろうか。

かく言う私も、上述のように東京の大学に進学した理由の一つに、「宗像から出たい」という想いがあった。在学中、中国(上海)に留学もしたが、今振り返ってみると、外から客観的に見つめることができたからこそ、

宗像の素晴らしさを再認識することができたと考えている。後輩の皆さんも機会があれば是非、国内外を問わず、積極的に外の世界を見聞してほしい。

◆終わりに

母校を離れ既に二十年近くが経過したが、今でも母校の校訓は私を精神的に支える「レガシー」として、心の中に在る。

後輩の皆さんも「質実剛健、自彊不息」の精神と共に、感謝の気持ちを忘れず、二度と戻らない貴重な三年間を、部活、勉強、友人と過ごす時間：何でも構わない、とにかく全力で生きてほしいと切に願っている(次回の執筆は私の同級生、本垣内英人さんです)。